

スタニスワフ・レム

完全な真空

沼野充義・工藤幸雄・長谷見一雄訳

Stanisław Lem



CONTEMPORARY
WRITERS



文学の国
江苏工业学院图书馆

完全な真空

藏书章

DOSKONAŁA PRÓŻNIA

スタニスワフ・レム

Stanisław Lem

完全な真空

DOSKONAŁA PRÓŻNIA

1989年11月20日初版第1刷発行

1990年2月5日初版第2刷発行

著者 スタニスワフ・レム

訳者 沼野充義/工藤幸雄/長谷見一雄

装画 マーク・コスタビ

装幀・造本 坂川栄治(坂川事務所)

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社 国書刊行会

東京都豊島区巣鴨3-5-18 郵便番号=170

電話=03-917-8287 振替=東京5-65209

印刷所 株式会社 キヤップス+セイユウ写真印刷株式会社

製本所 田中製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

完全な真空 スタニスワフ・レム 5

ロビンソン物語 マルセル・コスカ 13

ギガメシユ パトリック・ハナハン 39

性爆発 サイモン・メリル 57

親衛隊少将ルイ十六世 アルフレート・ツエラーマン

とどのつまりは何も無し ソランジュ・マリオ 91

逆黙示録 ヨアヒム・フェルゼンゲルト 107

白痴 ジャン・カルロ・スパランツァーニ 115

あなたにも本が作れます 129

イサカのオデユツセウス クノ・ムラチエ 137

てめえ レイモン・スーラ 151

ビーイング株式会社

アリストター・ウェインライト

159

誤謬としての文化

ヴィルヘルム・クロツパー

173

生の可能性について／予知の不可能性について

ツエザル・コウスカ

193

我は僕^{しもべ}ならずや

アーサー・ドブ

221

新しい宇宙創造説

257

完全な真空 日本語版

301

完全な真空

「完全な真空」

スタニスワフ・レム著 (チテルニク
読書人出版所、ワルシャワ)

Stanisław Lem, DOSKONAŁA PRÓŻNIA (Czytelnik, Warszawa)

実在しない書物の書評を書くということは、レム氏の発明ではありません。現代の作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスにその種の試みがある(例えば、『伝奇集』所収の「ハーバート・クウェインの作品の検討」)だけでなく、このアイデアはもっと昔にさかのぼり、ラブレーでさえも、それを実行に移した最初の作家ではないのです。しかしながら、『完全な真空』を一風変わったものになっているのは、それがまさにこういった書評だけを集めたアンソロジーを目標している点です。首尾一貫した銜学趣味というか、悪ふざけというか? 私には作者の意図は悪ふざけにあるように思われますが、その印象は、長大で理論的な序文によって弱められることもあります。この序文の中で、レム氏はこう述べています。「小説を書くという行為は、創造的自由の喪失の一形態にほかならない。(中略)一方、書評を書くという行為は、さらにいっそう卑しむべき苦役である。作家については、少なくともこう言うことができる——すなわち、彼は自ら選んだテ

「マによつて、自分を奴隷にしている、と。しかるに、批評家のおかれた状況はもつと悪い。徒
刑囚が自分の手押車に鎖でしばりつけられているように、書評者は論じられるべき作品にしばり
つけられている。つまり、作家は自分の本の中で自由を失うが、批評家は他人の本の中で自由を
失うのだ。」

このように単純化された論法に誇張がふくまれているのはあまりに明白なので、これを真面目
に受け取るわけにはいきません。序文（すなわち「自己批評をするゾイルス」〔ゾイルスは古代ギリシ
ヤの雄弁家。ホメロスの作品を酷評したことで有名〕）のその先の段落には、こう書かれています。「文学はこれまで、架空の登場人物
について語ってきた。我々はその先に進もう。つまり、架空の書物のことを書くのである。これ
こそ、創造の自由を回復するチャンスであり、それと同時に我々は、二つの相反する精神——す
なわち作家の精神と批評家の精神——を結び合わせることが出来るわけだ。」

「自己批評をするゾイルス」は、——とレム氏は説明します——「自乗された」自由な創造にな
るはずだ。なぜならば、あるテキストを批評する者は、自分自身がそのテキストそのものの中に
はいりこむことによつて、伝統的ないし非伝統的な文学の語り手よりも大きなテキスト操作の可
能性を得るからである。この見解には賛同してもいいでしょう。と言うのも、実際に今日の文学
は、走者が規則正しく楽な呼吸を求めるように、創り出されたものからのより大きな距離を求め
て奮闘しているからです。ただ不都合なのは、この博学的序文がどういうものかいつこうに終わ
ろうとしないことでもあります。この中でレム氏は、虚無の肯定的側面や、数学の理想的対象、そ
して、言語の新しいメタ・レベルについて語ります。悪ふざけにしては、こういった話はすでに
いささか冗長すぎるでしょう。その上、この序奏によつてレム氏は読者を（そして自分自身を
も？）すっかり惑わせてしまうのです。なにしろ、数々の偽書評から成るこの『完全な真空』は、

単なる笑い話の寄せ集めではないのです。私自身としては、原作者の意見とくいちがうことは承知のうえで、これらの書評を以下の三つのグループに分けたいところです。すなわち、

(1) パロディ、模倣作品、及び嘲笑。パステイ・シュここに属するのは、『ロビンソン物語』、『とどのつまりは何も無し』（これらのテキストは二つとも、それぞれ別の意味で、『ヌーヴオー・ロマン』を嘲笑したものになっています）、そしておそらくは『てめえ』と『ギガメシュ』もでしょう。もつとも、確かに、『てめえ』をここに含めることにはかなり問題があります。悪い書物を自分で考え出しておいて、それが悪い本だとききおろすことができるようにする、というのは、あまりにも安っぽい手口だからであります。形式面で最も独創的なのは、長篇小説『とどのつまりは何も無し』でしょう。これは誰にも書くことができないような小説であり、それゆえ、ここで適用される偽書評という手法が曲芸的なトリックを可能にしているからです。すなわち、存在しないだけでなく、存在し得ないような書物の批評、ということでもあります。『ギガメシュ』は、他の何よりも私の好みにあいませんでした。この本の趣旨は、複雑な創作の種明かしをする、ということです。しかし本当に、その種の落ちをつけることで傑作を片づけてしまっているのでしょうか？ ことによると、自分で傑作を書かないような作家にとっては、それでいいのかも知れません。

(2) 『親衛隊少将ルイ十六世』や、『白痴』そして『テンポの問題』のような、大作の概略を示す草案（結局のところ、これらのものは、独自の草案になっているのですから）。これらのいずれを取っても、おそらく、すぐれた長篇小説の萌芽となり得たでしょう。しかしながら、そうはいつても、まず最初にその小説を書くというのが、物の道理でしょう。批判的であろうとなかろうと、要約などは結局のところ、メイン・コースに対して食欲をそそる前菜オードブルにすぎないわけです。

が、その肝心のメイン・コースが台所にはないのです。なぜないのか？ ほのめかしによる批評はフェア・プレイではありませんが、私としては今回だけ、あえてそうさせていただきます。レム氏の抱いていたアイデアは、自分では完全な形で実現することのできないようなものだったので、書き上げるだけの能力はないが、書かないでおくのはもったいない、というわけです。『完全な真空』のこの部分の由来は、これですっかり説明することができます。しかるに、レム氏は、まさにそういった非難の聲があがるだろうというところを見通すだけの俊敏さはもちあわせていましたから、序文を書くことによって身を守ったわけです。それゆえ、自己批評をするゾイルス^{（ヴァレリーが絞切型の例としてあげたもの。後にブルトンが拾玉）}という描写を職人芸的に刈り込んでゆくことの必要性について語ります。しかし、すぐれた職人芸は、貧困なものではありません。レム氏をおびえさせたのは、私が先に単なる例えとして挙げた三冊の書物の一冊一冊が提示する困難の数々です。そこでレム氏は危険を冒さず、困難を回避し、言いぬけするという道を選びました。「あらゆる書物は、それが押しのけ、滅ぼしてしまつた無数の他の書物の墓である」と言うことによつて、レム氏は、自分の持つてゐる数多くのアイデアに対して自分の寿命が足らないということを読者に理解させようといふ（アルス・ロンガ、ウィック・プレグイス（芸術は長く、人生は短し））。しかしながら、重要でたいへん有望なアイデアが、『完全な真空』の中にそれほどたくさん含まれてゐるわけではまったくありません。ここにあるのは、すでに述べたように、自分の器用さの誇示です。もつとも、先ほど私はそれが悪ふざけかどうかを問題にしていたわけですが。しかしながら、私にはどうも、ここにもつと重要なことがあるような気がします。それは、すなわち、実現することのできない夢であります。

自分が間違つていない、と私に確信させてくれるのは、本書の最後の作品群であり、ここには、

たとえば、『生の不可能性について』、『誤謬としての文化』——そしてなかんずく——『新しい宇宙創造説』などが含まれます。

『誤謬としての文化』は、レム氏がこれまで自分の文学作品や論文集の中で再三再四説いてきた見解を引っくり返してみせてくれます。科学技術の氾濫は、これまでレム氏に文化を破壊するものとして厳しく非難されてきたわけですが、それがここでは人類を解放するものとして認められているのです。レム氏が二度目に背教者としての姿を示すのは、『生の不可能性について』に就いてです。ここで、家庭年代記の長々しい因果関係の鎖の馬鹿馬鹿しいほどの面白さに惑わされてはなりません。ここで問題なのは、こういった逸話の滑稽さではなくて、レム氏にとって最も神聖なもの——すなわち、確率理論——に対して攻撃がなされていることです。ところで確率とは、つまり、偶然のことであり、まさにこの範疇カテゴリーにもとづいてレム氏は多種多様で広範な自分の概念を組み立て、築き上げたのです。この攻撃は道化じみた状況の中で行なわれるので、攻撃の切っ先は鈍くなるはずであります。しかし、だからといって、この攻撃が一瞬といえどもグロテスクでないものと考えられたでしょうか？

そういった疑惑を吹き払ってくれるのが、『新しい宇宙創造説』であり、本書中にトロヤの馬のように隠されているものの、これこそは本書の *pièce de résistance* (主要作品) であります。悪ふざけでも、架空の書評でもないとする、一体これは何なのでしょうか？ これほど堂々たる科学的論証をはりめぐらされていると、悪ふざけと呼ぶには少々重すぎます。どうやら、この執筆のためにレム氏は百科事典類をむさぼり食ったものと見えます。レム氏をちよつと揺さぶってやれば、対数やら公式やらがうようよと出てくるのではないでしょう。『新しい宇宙創造説』はノーベル賞受賞者の架空の講演の形をとり、革命的な宇宙像を記述したものです。もしもレム氏の

他の著書を一冊も知らなかったならば、私は結局のところ、これは世界中でも三十人ばかりしかないその道の通のために——すなわち、物理学者及びその他の相対性理論の専門家のために——書かれた悪ふざけだと考えたことでしょう。しかしながら、それはどうもありそうもない話のように思われます。私としてはまたもやここに、作者を魅了し——そして、ひるませたアイデアが介在しているように思われるのです。もちろん、作者は決してそれを認めようとはしないでしょうし、私も、他の誰も、彼が〈遊びとしての宇宙〉の像を本気で考えていた、と彼に対して証明することはできないでしょう。作者としては常に文脈の遊戯性を、そして、本書の題名そのものを引き合いに出せるのです（「完全な真空」——とは、すなわち、中味は全く空っぽで「何もない」ということですから）。結局のところ、最良の避難所にして言い逃れは、*licentia poetica*（詩の自由）にあります。

しかしながら、これらすべてのテキストの裏にはある種の重々しさがひそんでいるように思われます。〈遊びとしての宇宙〉？ 〈目的論的物理学〉？ 科学の信奉者として、その方法論の前に平伏するレム氏としては、異端者・変節者の頭と自任することができませんでした。したがって、彼はこの考えを論文発表の形式にはめこむこともできなかったのです。しかるに、〈宇宙における遊び〉というアイデアを作品の筋立ての軸とすることは、通常のサイエンス・フィクションの系列の中で何番目かの場所を占める、もう一つの小説を書くことを意味するでしょう。

そこで、残ったのは一体何なのか？ 健全な頭脳にとつては、沈黙あるのみです。さてそこで、文学者が書かず、またどんなことがあるうとも決して書こうともせず、架空の著者たちに帰すことができないような書物——こういった書物こそは、まさにそれが存在しないということによって、おごそかな沈黙に驚くほど似通ったものになるのではないのでしょうか？ 異端思想からこれ以上

大きな距離をおくことができるものでしょうか？ これらの書物について、これらの論文について、他人のものとして語ることは、ほとんど、沈黙を守りながら語るにも等しいことです。とりわけ、それが悪ふざけの筋書きの中で起こるような場合には。

それゆえ、長年胸に秘められてきた、滋養豊かなリアリズムに対する飢餓感から、あまりに大胆な見解を含むため、直接表現することもできないような思考から、そして、人が夢見ながら決して実現させられないあらゆるものから——まさに、こういったものから、『完全な真空』は生まれたのです。「文学の新しいジャンル」の根拠を示すとか称する理論的な序文は注意をそらすための策略でありまた、手品師が自分の本当に、やっていることから我々の目をそらすために故意に見せつける動作^{ジェスチャー}なのであります。読者は、作者の器用さが誇示されるのだろうと——実際にはそうではないのに——信じ込むはずです。「偽書評」という手法がこれらの作品を生み出したのではありません。むしろ、これらの作品が——空しく——表現を求めて、この手法を言い訳として、口実として使ったのだというべきでしょう。もしもこの手法がなかったならば、すべては沈黙の領域にとどまっていたことでしょう。というのもここで試みられているのは、大地にしっかりと根ざしたりアリズムのために空想の領域を裏切ること、経験論の領域における変節、そして科学における異端だからです。はたして、レム氏は、自分の策謀が見破られないと本当に思っていたのでしょうか？ この策謀とは、いたって簡単なものです。つまり、真面目な顔をしてはとても囁くことができないことを、笑いに紛らわして大声で言ってしまうことであります。序文の語るところにもかかわらず、批評家は「徒刑囚が自分の手押車に鎖でしばりつけられているように、書物にしばりつけられている」必要はありません。批評家の自由というものは、書物をほめたりけなしたりできるといふ点にあるのではなく、書物を通じて——まるで、顕微鏡をの

ぞくように——作者の姿を見ることができるといふ点にあるのです。そして、そうする時、『完全な真空』は、読者が望んでいながら、所有することのできない物語であることがはっきりとわかってきます。これこそは、実現されなかった数々の夢想の書物です。そして、抜け目のないレム氏がそれでもなお逃げ口上として利用できるのは、ただ一つ、以下のような主張の形をとった反撃の言葉でしょうか。「この書評を書いたのは批評家の私ではなく、原作者のレム自身であり、それを本書『完全な真空』を構成する一部にしたてあげたのもレムなのだ。」

「ロビンソン物語」

マルセル・コスカ著（書肆スィユ、パリ）

Marcel Coscat, LES ROBINSONADES (Editions du Seuil, Paris)

デフォーのロビンソンの後には、子供向けの削除版『スイスのロビンソン』やら、その他、この孤島生活をさらに子供向きに書きかえた版やらが数多く出たものだ。一方、二、三年前にパリのオリンピア社が時代精神に迎合して出版した『ロビンソン・クルーソーの性生活』はじつにくだらないしろもので、著者の名前を挙げる必要さえないほどである。なにしろ、この著者は、出版社自体の所有物でしかないような数あるペン・ネームの一つによって自分の正体を隠しているのであり、そんな売文業者たちを雇い入れるこの出版社の目的といえば、周知の通りだからである。しかし、マルセル・コスカの『ロビンソン物語』には、待っただけの価値がある。これは、ロビンソン・クルーソーの社交生活であり、社会福祉事業であり、群集の中で彼が過ごした厄介で困難な生涯である。というのも、本書が扱っているのは孤独の社会学——すなわち、物語の結末には人ごみのために足の踏み場もなくなってしまう無人島の大衆文化だからである。

コスカ氏が書いた作品には、読者もすぐに気づくように、剽窃まがいの性格や商業主義的性格はない。また、センセーションをねらったわけでもなく、孤島生活のボルノグラフィをこととするわけでもなく、コスカ氏は難船者の欲望を毛むくじやらの実のなるココナツツの木やら、魚、山羊、斧、きのこ、難破した船から救い出されたハムなどに向けたりはしない。本書のロビンソンは、「オリンピア」版の場合とは違って、もはやたけり狂った雄^{おす}ではなく、したがって、男根一角獣のごとく木のしげみや砂糖きび畑や竹林を踏みにじったりもしなければ、砂浜や山の頂や入江の水、鷗のさえずり、あほうどりの崇高な影、嵐のために岸に追いやられる鱻などを犯したりもしない。

セルジュ・Nは、自分のおかれた状況を認識するや、従順に妥協して運命の言うなりになるどころか、むしろ、本物のロビンソンになるべく決意するのだ。その手始めに、彼は自らすすんでまさにこのロビンソンという名を受け入れるのだが、それももつともなことだろう。なにしろ、彼としてはもはや、それ以前の生活からいかなる利益を引き出すこともできないのだから。

難船者の運命は、その数々の生活上の不便を数え上げただけでもわかるようにひどく不愉快なものであり、したがって、はじめから無駄とはわかつていても、失われたなつかしいものを取りもどす努力をせずにはいられなくなる。発見されたあるがままの世界は、人間的に整えられる必要がある。そんなわけで、セルジュ・Nは、自分自身だけでなく島自体をもまったくのゼロの状態から作り上げて行こうと決心するのである。コスカ氏の新ロビンソンは、いかなる幻想も抱いていない。彼は知っている——デフォーの主人公が虚構であり、そのモデルとなったセルカークという水夫が実は、何年もたつてたまたまどこかの帆船に発見された時にはまったく獣のようになつていて、言葉さえしゃべれなかった、ということ。ロビンソン・クルーソーは、フライデ